

ツルナゴーラを想像する

——近現代日本の大衆文化におけるモンテネグロの国名の利用

中澤 拓哉

キーワード：モンテネグロ、外国地名表記、大衆文化、バルカニズム、近現代日本

1. 問題の所在——モンテネグロとツルナゴーラ

アドリア海に面する人口およそ60万の小国モンテネグロは、現地で用いられるセルビア・クロアチア語¹では「ツルナ・ゴーラ (Crna Gora)」という(以下では、読みやすさと他の文献との整合性を考慮して、中黒のない「ツルナゴーラ」と表記する)。これは「黒い山」を意味し、² 近隣の諸言語や同系統のスラヴ諸語では、しばしば各言語で「黒い山(の国)」を意味する語で呼ばれる。たとえばトルコ語では「カラダー (Karadağ)」、アルバニア語では「マリ・イ・ズィ (Mali i Zi)」、ギリシャ語では「マヴロヴニオ (Μαυροβούνιο)」、ロシア語では「チェルノゴリーヤ (Черногория)」、そしてヴェネト語では「モンテネグロ (Montenegro)」である。このヴェネツィアでの呼称「モンテネグロ」がイタリア以西のヨーロッパに広まったことで、歴史的にモンテネグロと関係の薄かった地域ではヴェネト語由来の表記が普及することになった。

日本において、この国名は複数の原則に則って表記されてきた。幕末・明治期には、オランダ語や英語といった西欧諸語の呼称を音訳して「蒙的尼」や「モンテ子グロ」と表記されることが多かったが³、バルカン戦争から第一次世界大戦、パリ講和会議へと至る時期においては、国名の意識である「黒山国」という表記が普及した⁴。その後、昭和期に再び「モンテネグロ」表記が主流となるが、戦後のスラヴ研究・東欧研究の発展に伴い、専門的な文献ではセルビア・クロアチア語での呼称の音訳である「ツルナゴーラ」という表記も用いられることがある⁵。

語源に関する知識も古くから流通しており、明治期のある地理書では、

モンテ子グロトハ伊太利語ニシテ元來ノ名稱ツッセルナゴラ及ヒ土耳其ノ「カラダー」ヲ譯セシモノナリ此三語ハ黒山ヲ意味シ而シテ此國ハ松柏檜等ノ暗林鬱蒼トシテ殆ント全土ヲ蔽ヘルヲ以テ其名恰モ能ク此國ヲ解釋セリト云フ可シ[……]⁶

というように、モンテネグロがイタリアの言語に由来する呼称であり、「黒い山」を意味すること、そして現地語では「ツルナゴーラ」と呼ぶことが紹介されていた。ある大正期の外交官は、旅行記の中で「『モンテネグロ』とは伊太利語で黒山の義であることは世人の知る通りである」⁷と書いており、海外情勢に関心を

1 社会主義期にセルビア・クロアチア語と呼ばれていた言語は、ユーゴスラヴィア解体によってセルビア語・クロアチア・ボスニア語・モンテネグロ語へと分裂したが、本稿では便宜上「セルビア・クロアチア語」と呼称する。この事情について、詳しくは、拙稿「言語の数えかた——旧ユーゴスラヴィア諸国におけるセルビア・クロアチア語の事例から考える」、エスニック・マイノリティ研究会編『多様性を読み解くために』東京外国語大学海外事情研究所、2020年、149-156頁を参照。

2 「山」を意味する女性名詞 gora が、「黒い」を意味する形容詞 crni の女性単数主格形 crna によって修飾されている。

3 拙稿「近代日本におけるモンテネグロの国名表記——幕末・明治期を中心に」『或問』43号、2023年、66-77頁。

4 拙稿「明治・大正期の外国地名表記を訪ねて」『スラブ・ユーラシア研究センターニュース』162号、2021年、18頁。

5 たとえば、著名なスラヴ学者の三谷恵子は、一貫して「ツルナゴーラ」と表記してきた。三谷恵子「クロアチア語ハンドブック」大学書林、1997年、i頁；同『スラヴ語入門』三省堂、2011年、8頁；同『比較で読みとくスラヴ語のしくみ』白水社、2016年、11頁。

6 伴山三郎『近世萬國地誌』博文館、1889年、188-189頁。

7 信夫淳平『東歐の夢 全』外交時報社出版部、1919年、152頁。この旅行記については、拙稿「日本・モンテネグロ関係の濫觴——幕末および明治期における外交と言説」『アジア地域文化研究』17号、2021年、31-32頁も参照。

8 たとえば、柴宜弘編『もつと知りたいユーゴスラヴィア』弘文堂、1991年、4、138、227頁；柴宜弘「モンテネグロ」、伊東孝之ほか監修『東欧を知る事典』平凡社、1993年、736頁など。

持つ知識層のあいだでは、モンテネグロの国名の意味については知られていたと考えられる。戦後に入ると、モンテネグロとは「黒い山」の意であり、セルビア・クロアチア語でツルナゴーラと呼ばれる、という知識は事典や入門書にも記載されるようになっていった⁸。

このような外国地名の日本語表記や、その揺れ・変遷は、これまで純粋に技術的な問題として研究されることが多かった⁹。しかし、外国地名の日本語表記は単なる技術的問題ではなく、ときには外交上の問題に発展することもあるし¹⁰、本稿で検討するように、小説や漫画の演出に影響することもある。

モンテネグロという国名は、多くの日本の読者にとっては馴染みが薄く、また「黒い山」という直訳が可能であり、なおかつ「ツルナゴーラ」という別名も用いられていることから、小説や漫画などの創作物において、その意味や複数性がギミックとして利用されることがある。日本の創作物における旧ユーゴスラヴィア地域の表象¹¹については、これまで複数の作品が取り上げられ、ユーゴスラヴィア紛争などの現実世界での出来事や言説がどのように創作物に影響したのかが検討されてきたが¹²、モンテネグロに関しては、東海散士^{とうかいさんし}『佳人之奇遇』中の記述しか論じられておらず¹³、ましてや地名に注目したものは見当たらない。本稿では、近現代日本において発表されたモンテネグロが登場する創作物のうち、その国名の意味や表記の複数性が演出に影響している作品を5つ取り上げ¹⁴、それがどのように作中で利用されているかを分析することで、近現代日本における旧ユーゴスラヴィア像の研究をより深化させるだけでなく、外国への認識を地名の利用のされ方を通して分析するという、近現代日本の文化史に対する新しいアプローチを提案したい。

なお本稿では、田中芳樹^{たなかよしき}『マヴァール年代記』、米澤穂信^{よねざほのぶ}『さよなら妖精』、および日之下あかめ^{ひのしたあかめ}『エーゲ海を渡る花たち』の展開に触れることを予め断っておく。

2. ステレオタイプの反映としての地名——樋口麗陽『凡人の見たる皮肉諷刺哲学』

『小説日米戦争未来記』などの作品を著した文筆家樋口麗陽^{ひぐちれいよう}によって1921(大正10)年に書かれた『凡人の見たる皮肉諷刺哲学』は、題名からも察せられるように様々なジョークからなる本である。その1章「與太博士の大名著」に、モンテネグロが登場する。

この章は、次のような書き出しで始まる。

大正嘘八百年法螺萬月の頃、與太博士、苦心慘憺十八年の天津風、艱難辛苦の其末に、ヤットコサと『語呂々々解釋滑稽字引』と銘打つた一書を打ち上げ日本中の出版屋に恐引受を交渉し見たれど、お題目を拜見したばかりで、何奴も此奴も忽ち恐縮仕り[……]出版を御辭退仕るとは甚だ以て不埒千萬、ヨシ出版屋が眞の料簡ならばと、大いに憤慨、七轉八倒四苦

9

このような研究動向に対して、地名表記を社会言語学的に捉えようとする研究も出現している。アンナ・シャルコ「日本語の表記体系における漢字の機能——外国地名・人名の表記を中心として」早稲田大学提出博士論文、2021年、特に2, 206-207頁。

10

一例として、アンナ・シャルコ「音訳地名の表記における漢字の表意性について——ロシアの国名漢字表記を例として」『早稲田日本語研究』25号、2016年、31-38頁を参照。

11

新聞など、創作物以外における旧ユーゴスラヴィア地域の表象については、田中一生「日本=ユーゴスラヴィア文化交流の歴史と現状」、『日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究——1981年9月国際シンポジウムの報告集』東欧史研究会と日本東欧関係研究会、1982年、127-132頁；石田信一「クロアチアと日本の交流史に関する一考察」『跡見学園女子大学人文学フォーラム』2号、2004年、43-54頁；Inaba Mitsutoshi, “Pisanje japanskih listova o Sarajevskom atentatu,” *Prilozi* 45 (2016), pp.106-116; 拙稿「日本・モンテネグロ関係の濫觴」、32-36頁；同“‘Istočno pitanje kroz dalekoistočne oči: Japanski pogledi na ustanke u Hercegovini (1861-1878),” *Prilozi* 50 (2021), pp.77-99を参照せよ。

12

南塚信吾「『佳人之奇遇』における東ヨーロッパ」、同編『ハンガリーにおける諸外国認識の史的的研究』千葉大学大学院社会文化科学研究科、1998年、5-7頁；拙稿「現代日本のサブカルチャーにおける(旧)ユーゴスラヴィア地域の表象とイメージ——紛争・ノスタルジア・サライエヴォ」『比較文学・文化論集』30号、2013年、43-55頁；同「魔女は細部に宿る——『ストライクウィッチーズ』の世界観に関する一試論」『まぐまPB』12号、2021年、19-21頁。

13

田代文雄「『佳人之奇遇』と日本の東欧認識」、『日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究』、180頁；南塚「『佳人之奇遇』における東ヨーロッパ」、5頁；拙稿「日本・モンテネグロ関係の濫觴」、35-36頁。

八苦面の後[……]ヤットコサと印刷製本を終り、一撃百萬部を賣るつもりで、全国各新聞の各一頁を潰した大廣告を大々的に行き、洛陽の市價を暴騰させる筈であつた目算ガラリ外れて頓と賣れず[……]今参考の爲め、左に最も傑作らしいものゝみを、チヨロピリ拔書してお目にかくべし¹⁵。

このように、本章は冒頭から語呂に関する与太話を披露すると言明しており、その言明の通りに外国の地名についての下らない語呂合わせが披露される。ペトログラード(Перпорга)は「帝制時代に露國皇帝が獨逸のベテン政策に誑かされてグラーツへと動いたから「ペテログラード」と名付けられたとか¹⁶、ブダペシュト(Budapest)は豚ベストが流行しているからブダベストだとか、ロンドン(London)は世界の金がドンドン入ってくるからロンドンだとか、メキシコはメッキ師の子供によって栄えたからメキシコだとか¹⁷、そういった類の洒落が延々と続いた後に、モンテネグロという国名の語呂合わせが登場する。

モンテネグロ
黒山國——歐洲バルカン半島で一番チツポケな國。随つて人口も一番少いが、此國の門弟は何の門弟にせよ、怠惰者ばかりで、寝て食ふことばかりを考へ些とも勉強せず。即ち『門弟寝て食ふ』といふ所からモンテネグロの國名となれり¹⁸。

モンテネグロ人には様々なステレオタイプがつきまとう¹⁹。一方では、彼らは非常に勇敢な人びとであるというステレオタイプがあり、明治・大正期の日本にもそのような認識がもたらされている²⁰。他方で、彼らは怠惰な人びとであるというステレオタイプもまた、根強いものがある²¹。樋口の「門弟寝て食ふ」からモンテネグロだという語呂合わせは、「怠惰なモンテネグロ人」というステレオタイプを取り入れていることが指摘できる²²。樋口の作品では、国名に関するジョークが、同時に、現地人に対する否定的ステレオタイプを強化する役割を果たしているのである。

3. 言葉遊びとしての地名——奥野他見男『月給日の兄さん』

モンテネグロの国名を利用した創作として、1933(昭和8)年に刊行された奥野他見男(本名西川他見男)による短編小説集『月給日の兄さん』は興味深い例である。同書に収められた小説はいずれも軽妙な調子で描かれた滑稽譚だが、そのうちの一つ「ノック・アウト」で、モンテネグロの国名が利用されている。

「ノック・アウト」は、5年生である主人公の那可子が、美男子で自慢の「リーベ」である石谷が「帝都座のダンスアに夢中になつてゐる」²³ことを嗅ぎつけてしまふ、という話である。那可子は家に訪れた石谷を難詰し不貞の事実を認めさせると、石谷に別れを告げ、復縁を求めて食い下がる彼をすげなくあしらう。そのようなやり取りの中で、モンテネグロの地名が出てくるのである。

14

以下で、モンテネグロが登場するが本稿では分析対象としない作品を挙げ、その理由を説明する。

大正期に藤沢衛彦(藤沢紫浪名義)によって執筆された『露国間諜女公爵ソニヤ』は、イタリアのチネス(Cines)社が製作したバルカンを舞台にした映画をもとにした小説であり、「黒山國」や「モンテネグロ」という表記が使われているが、表記の揺れは作品の内容に影響を与えていないので、分析対象とはしない。藤沢紫浪『露国間諜女公爵ソニヤ』続文館、1912年、95、201頁。

ユーゴスラヴィアのバルチザン闘争を描いた坂口尚『石の花』では、モンテネグロは地図や台詞でわずかに触れられるのみであり、「ツルナゴラ」「モンテネグロ」「MONTENEGRO」といった複数の表記が登場するものの、その違いに特段の意味はない。よって同作は分析対象とはしない。坂口尚『石の花1——侵攻編』講談社漫画文庫、1996年、3頁；同『石の花3——内乱編』講談社漫画文庫、1996年、248頁；同『石の花4——激戦編』講談社漫画文庫、1996年、72、120、247頁。

もちろん筆者は悉皆調査を行ったわけではなく、モンテネグロの地名が演出に影響している作品が他にもあるかもしれない。その場合は、ご教示とご叱正をいただければ幸いである。

15

樋口麗陽『凡人の見たる皮肉諷刺哲学』二松堂書店、1921年、239-240頁。

16

前掲、243頁。

17

前掲、248-252頁。

18

前掲、251頁。

19

近代西欧のモンテネグロ人観については多くの研究があるが、ひとまず、Božidar Jezernik, *Wild Europe: The Balkans in the Gaze of Western Travelers* (London: Saqi, 2004), pp.105-120; Sanja Lazarević Radak, *Otkrivanje Balkana* (Pančevo: Mali Nemo, 2013), pp.116-117を参照せよ。近代西欧においては、モンテネグロに限らずバルカン半島全体が、最も身近な異国趣味の対象となった。ブルガリア出身の歴史家マリヤ・トドロヴァ(Мария Николаева Тодорова)は、1997年の著書『バルカンを想像する』の中で、これをバルカニズム(Balkanism)と呼んでいる。近代西欧のバルカン表象についてもまた

「何とでも仰有い。貴女みたいな方は、モンテネグロのお寺へでも行つて、鐘撞き生活の一年でも送つてゐらつしやい。モンテネグロどこにあるか、知つてらつしやいますか」

「モンテネグロ？ 活動俳優の名ぢやありませんか」

「ポーラネグリと間違へてゐらつしやるんぢやありません？」

「なアんだ。小説の名だよ」

「しつかりしてよ。あれはモンテクリストよ。[……]」²⁴

最初に「貴女」と書かれているので紛らわしいが、これは誤記であり、那可子から石谷に向けた台詞である²⁵。つまり、那可子が石谷に「モンテネグロに行け」と告げている場面ということになる。石谷はそもそもモンテネグロという固有名詞に聞き覚えがないようで、映画俳優ポーラ・ネグリ(Pola Negri)²⁶や、『巖窟王』の主人公モンテ＝クリスト(Monte-Cristo)といった固有名詞とモンテネグロを混同する。当然モンテネグロがどこにあるのかも知らない石谷は、那可子に対して何度も場所を教えてくれるようにせがむ。

「[……]那可さん、教へて下さい、モンテネグロで、どこでしたつけ」

「ほらあすこよ」

「あすこつて」

「歐洲、それだけ教へて上げますわ」

「歐洲のどこ」

「よく考へもしないで、そんなに追窮するものぢやありませんわ。家へ歸つてから、萬國地圖を出して、調べなさいな」

「那可さん知つてるの」

「知つてます。歴乎とした地名よ」²⁷

那可子はさらに答えを求める石谷を「い、え、男の方に恥を掻かしたくないわ。よくお考へなさい。英國に無いことだけ申しおきます」²⁸と突き放す。しかし実際には、彼女自身もモンテネグロがどこにあるかを知らないのである。

モンテネグロつて、本當に何處だつたか知ら。女學校の地歴の先生になるんだつたら、あたし確つかり覚えておくんだつたけど。モンテネグロ。モンテカルロ、モナコ、まるでわたし、わたい、わらは、と同じ位粉れ易いのね。[……] ²⁹

それでも那可子は、モンテネグロという地名を持ち出して石谷を追及するのをやめようとしなない。

「貴方、本當にモンテネグロへいらつしやるんですよ」

と、あたし念を押しました所、石谷さん雲を掴む様な顔をして、途方に暮れて了つた³⁰。

多くの研究があるが、ひとまずは、Ели Скопетеа, “Оријентализам и Балкан,” *Историјски часопис* 38 (1991), стр.131-143; Maria Todorova, *Imagining the Balkans*, updated edition (Oxford: Oxford University Press, 2009), esp. pp.3-20; Milica Bakić-Hayden, *Varijacije na temu “Balkan”* (Belgrade: Institut za filozofiju i društvenu teoriju; Filip Višnjić, 2006), esp. pp.15-28を参照せよ。

20

明治期の言説については、拙稿「日本・モンテネグロ関係の嚆矢」、33-36頁を参照。大正期には、たとえば、「此國の人民はスバルタ人に能く似て昔から剽悍無比、土耳其さへ遂に手を下し得ず昔から獨立して居る」という学者による解説が新聞に掲載されるなどしていた。「要するに子供は喧嘩なり——殺氣漲る巴爾幹」『香川新報』1912年10月10日、1頁。

21

Edyta Koncewicz-Dziduch, “Sociocultural Characteristics of Montenegrins: The Negative Message in Positive Jokes,” *European Journal of Humour Research* 5, no.2 (2017), pp.74-76. エディタ・コンツェヴィチ=チドゥフは、「人は疲れて生まれ、休むために生きている」に始まる「モンテネグロ人の十戒」というエスニック・ジョークを紹介しているが、これはモンテネグロで売られている土産物にも書かれており、現地人にも受容されているジョークであるといえる(筆者も「十戒」が書かれたTシャツを買ったことがある)。

22

ただし、これは深読みのしすぎであつて、単に樋口の考えた適当な語呂合わせが偶々ステレオタイプと合致しただけ、という可能性も十分に考えられる。

23

奥野他見男『月給日の兄さん』東文堂、1933年、68頁。

24

前掲、84-85頁。

25

石谷は作中で明確に「男」とされているので、実は2人はエスの関係であったというような叙述トリックではない。

26

ポーランド出身で、本名はアポロニヤ・ハウピェツ(Apolonia Chalupiec)。

27

奥野『月給日の兄さん』、85-86頁。

最終的に、石谷は那可子に睨みつけられて彼女の家から去る。この顛末は、作者によって野球の実況のごとく語られており、それが「ノック・アウト」という題名の由来である³¹。

この会話で那可子が持ち出したポーラ・ネグリやモンテ＝クリスト伯、さらにモナコの地名モンテ・カルロ (Monte Carlo) といった固有名詞は、確かに「モンテネグロ」という地名と共通する語源を持つ。証拠は見つけられていないが、おそらく奥野は「モンテネグロ」の語源に関する知識を得た上で本作を書いたのだろう。奥野は官吏の家に生まれ、金沢医学専門学校薬学科を卒業しており³²、彼も含めた8人の兄弟姉妹のうち末弟を除く7人が学士号を取得するという³³、当時としては非常に高学歴な家庭に生まれ育った人物であった。また彼は歓楽街に親しみ、先行研究では「洋物好きでハイカラ好み」³⁴と評されている。このような経歴の人物であれば、当然、モンテネグロという地名とその語源も承知していようし、当時人気だった俳優や巖窟王の名、モナコの地名と結びつけることもできたであろう。

本作においてモンテネグロの地名は、該博な知識を有した著者によって、語源を利用した言葉遊びの対象とされ、また、文章にリズムカルさを添えていることがわかる。「モンテ」や「ネグロ」に類する語を含む固有名詞が西欧に多く存在していること、そして、モンテネグロが日本人にとって縁遠い存在であることの双方が可能にした言葉遊びであり、本作は当時の日本社会におけるモンテネグロの受容の在り方を浮かび上がらせているといえよう。

4. 雰囲気作りのための地名——田中芳樹『マヴァール年代記』

1988(昭和63)年から1989(平成元)年にかけて刊行された田中芳樹のファンタジー小説『マヴァール年代記』(全3巻)³⁵は、ハンガリーを模した架空の帝国「マヴァール」を舞台とし、皇帝の位に就くカルマーンと野心家の選帝公であるヴェンツェル、そして騎士リドワーンという、かつて学友であった3人が乱世で活躍し、最終的には敵対していくという物語である。カルマーンは積極的な対外拡張政策を採り、第2巻で隣国「ツルナゴラ」を併合することでマヴァールの領域を史上最大のものとする。

本作の舞台であるマヴァールは、東方からの遊牧民によって盆地に築かれた国であるとされ、田中によって「中世から近世にかけてのハンガリーと、その周辺諸国」がモデルであることが明言されている³⁶。田中は、自身が架空の世界を舞台にした小説を書くとき、「その世界のモデルになるものが、かならずこちら側の世界に存在」し、また「架空世界の骨格をさだめておくことは、人名や地名や食生活など、その世界に固有の雰囲気^{かも}を醸し出すのに有益」であると述べており³⁷、実際にマヴァールのみならず、「エルデイ」「クールラント」「リスアニア」といった本作に登場する架空の国名は、多くがヨーロッパ東部の現実の地名や

28
前掲、86頁。

29
前掲。

30
前掲、86-87頁。

31
「^{これ}で完全に彼氏^{くわんげん}ノックアウト^{かれし}されました」という一文がある。前掲、83頁。

32
桑原恵美「評伝奥野他見男——家庭人『他見男さん』を中心に」『立教大学大学院日本文学論叢』8号、2008年、176-179頁。

33
前掲、187頁、註12。

34
前掲、180頁。

35
現在では、1冊にまとめられた創元推理文庫版のみが新刊本で入手可能となっている。

36
田中芳樹「作者のことば」、同『マヴァール年代記2——雪の帝冠』角川書店、1988年、裏表紙。

37
前掲。

38
それぞれ、歴史上の遊牧民「アヴァール(Avar)」とハンガリー人の自称「マジヤル(Magyar)」の合成、トランシルヴァニアのハンガリー語名「エルデイ(Erdély)」、ラトヴィアのクルゼメ地方のドイツ語名「クールラント(Kurland)」、リトアニアの英語名「リスエイニア(Lithuania)」に由来するものと推測できる。

39
田中芳樹『マヴァール年代記1——氷の玉座』角川書店、1988年、99頁。

40
田中『マヴァール年代記2』、99頁。

41
前掲、71-72頁。

42
前掲、31頁。ダニロ1世(Danilo I、在位1852-1860)は、従来は主教が世俗の統治者をも兼ねていたモンテネグロを、世俗の公国へと変えた人物である。

国名、人間集団の呼称に由来している³⁸。本稿で検討する「ツルナゴース」もその一つであるといえよう。

「ツルナゴース」は、第1巻ではマヴァールの「東北方」³⁹と描写されているが、第2巻以降では、マヴァールの南にあり⁴⁰、「疆域は八十州、人口は二千二百万を算える」「土地も肥沃であり、農産物も海産物も豊か」と変更された⁴¹。このように、第1巻時点では「ツルナゴース」の設定は定まっていたが、第2巻以降では「ダニエロ四世」という実際のモンテネグロ公と同名の王が登場し⁴²、首都の名（「カルローツァ」）⁴³や州の数なども詳しく設定されている。

しかし登場する「ツルナゴース」人の名前は、「ダニエロ四世」や「パヴァオ男爵」⁴⁴のように現地語に即しているものもあるものの、多くは「アデルハイド」⁴⁵や「ボモージュ」⁴⁶、「イブシランティ、ブラショウ」⁴⁷のようにセルビア・クロアチア語の伝統的な人名とはかけ離れている⁴⁸。「ツルナゴース」が肥沃な国と設定されていることと考え合わせると、作中の「ツルナゴース」は、いくつかの要素が現実のハンガリーと共通するマヴァールとは違い、実際のモンテネグロをモチーフにしているわけではなく——実際のモンテネグロは山がちで、肥沃とはお世辞にも言えない——田中が物語の展開のために一から設計した国であり、ツルナゴースという地名といくつかの人名だけが現実と共通しているといえる。

田中の作品における登場人物の名前は、各国の人名が並んでいる年鑑などを利用し、「その中から、雰囲気のある名前をいただいちゃ」うという方法でつけられることが多い⁴⁹。そして「ツルナゴース」は「モンテネグロ」と違い、西欧諸語の知識からは意味を推し量ることができず、日本語母語話者にとって謎めいた響きを持っている。したがって「ツルナゴース」は、架空世界を創作する上で「雰囲気のある」地名として採用されたのだろうと推測することができる⁵⁰。2通りの国名表記のうち、使われることが少なく人口に膾炙していない表記であるがゆえに、「ツルナゴース」は日本語のファンタジー作品の中に取り入れられることになったのである。

5. 謎としての地名——米澤穂信『さよなら妖精』

2004（平成16）年に刊行された米澤穂信の『さよなら妖精』⁵¹は、ユーゴスラヴィアから来た少女マーヤが日本の様々な謎に興味を持ち、主人公守屋路行が友人の助けを借りつつその謎を解いていく⁵²、という筋書きであり、推理小説の中でも「日常の謎」と呼ばれるジャンルに属する。

この作品は、1991（平成3）年に高校生である守屋と友人の太刀洗方智がユーゴスラヴィアの少女マーヤと出会うところから始まるが、守屋は当然ながらその時点ではユーゴスラヴィアに関する知識を持っていない。そんな守屋たちにマーヤは、

43

おそらく、現セルビア領スレムスキ・カルロヴツィ（Sremski Karlovci）のハンガリー語名カルローツァ（Karlóca）が由来であろう。

44

田中『マヴァール年代記2』、166頁。おそらく、「パウロ」にあたるクロアチア語名「パヴァオ（Pavao）」に由来すると思われる。作中では「ラゲーズス城の城守」（前掲）。この城の名は、おそらくラゲーズ（註64を参照）に由来するのであろう。

45

前掲、32頁。作中ではツルナゴースの王女であり、のちにカルマーンの妃となる。

46

前掲、142頁。作中ではツルナゴースの將軍。

47

前掲、76頁。作中ではいずれもツルナゴースの將軍。

48

「アデルハイド」はドイツ語の女性名アデルハイト（Adelheid）のことであろうし、「イブシランティ」は、ギリシャ独立戦争の指導者でありロシア帝国の軍人でもあったアレクサンドロス・イブシランティス（Αλέξανδρος Υψηλάντης）の姓のロシア語読みイブシランティ（Ипсиланти）が由来であろう。「ボモージュ」や「ブラショウ」に至っては、ポーランドの地域名ボモージュ（Pomorze）や、ルーマニアの都市名ブラショヴ（Braşov）といった、人名ではない他国の地名に基づいているのではないかと推測しうる。

なお、「ジュラージュ」という登場人物もあり、これは中世セルビアの君主の名ジュラジ（Đurađ）に由来すると推測されるのだが、第3巻では「ジェラージュ」と表記されていた。おそらく「ユ」と「エ」を取り違えたのであろう（田中は原稿を手書きすることで知られている）。のちの愛蔵版では、この誤記は修正され「ジュラージュ」に直っていることが確認できる。前掲、72頁；田中芳樹『マヴァール年代記3——炎の凱歌』角川書店、1989年、78頁；同『愛蔵版マヴァール年代記』角川書店、1996年、474頁。

49

田中芳樹監修『銀河英雄伝説ハンドブック』徳間デュアル文庫、2003年、364頁。

「んー、そう。まちさん、もりやさん、レプブリカの一つ、ツルナゴーラ^{ツルナ ゴーラ}知ってますか？」⁵³

と問いかけ、「ツルナゴーラ」がかつて日本と戦争をしたが、未だに講和条約を結んでいないため、両国は戦争状態であるという逸話を披瀝する⁵⁴。

ここで「ツルナゴーラ」がラテン文字で表記されているのは、本作でマーヤが口にするセルビア・クロアチア語の単語は、初出時にラテン文字で書かれカタカナで振り仮名が振られるが、二度目以降はカタカナのみで表記されるという原則があるからであり⁵⁵、実際に次に言及される時は「ツルナゴーラ」⁵⁶のようにカタカナのみで表記される。

本作において、マーヤは基本的にユーゴスラヴィアを構成する共和国をセルビア・クロアチア語の名称で呼ぶため、セルビア・クロアチア語の呼称と日本語の呼称が乖離している場合、主人公はそれがどの共和国を指すのかわからずに戸惑う。たとえば守屋はマーヤの指す「フルヴァツカ」がどこのことかわからず、

「フルヴァツカというのは」

「日本では、クロアチアと呼ばれます」⁵⁷

という問答をしている。同様に、守屋は日本語のユーゴスラヴィアに関する書籍を読んで「モンテネグロ」に関する知識を得るも⁵⁸、それがマーヤの言う「ツルナゴーラ」だとすぐには結びつかない。しかし、別の友人が「セルビアとモンテネグロ、どちらがマーヤの故郷なのか、どうしてもわからない」⁵⁹と言うのを聞きながら、マーヤが「ツルナゴーラ」出身ではないことに気づく。

マーヤは、明らかにツルナゴーラの人間ではない。しかしツルナゴーラとはどこのことか。フルヴァツカがクロアチアだったように、ユーゴスラヴィア内の話だろうと見当はつく。六共和国のどれかが、現地名ツルナゴーラなのだ。では、ツルナゴーラとはどこのことか。[……]⁶⁰

そして守屋は、これまでのマーヤとの会話と本から得た情報を元にして、「ツルナゴーラとは、モンテネグロのことを指している」⁶¹という結論に至る。このことが、戦争勃発後に故郷を言わぬまま帰国したマーヤが、ユーゴスラヴィアの6共和国のうちどの共和国へ帰っていったのか、という、本作最後の謎を解き明かす上で重要な役割を果たすことになった。

このように『さよなら妖精』では、慣用表記と現地音に基づく表記との間の懸隔が物語の重要な仕掛けとして機能していることが確かめられる⁶²。日本語における表記の複数性は煩雑と感じられるかもしれないが、『さよなら妖精』はそれを逆手に取って推理小説の謎解きとして利用しているのである。

50

日本国外の文学作品における東欧風の架空地名については、Vesna Goldsworthy, *Inventing Ruritania: The Imperialism of the Imagination*, revised and updated edition (London: Hurst & Co., 2013), pp.48–81; 岩松正洋「幻視された東欧——クノー、ル・グイン、ルノー・カミュ、ルーボーの架空国」『フランス語フランス文学研究』77号、2000年、61–70頁を参照。架空世界における現実の固有名詞の流用が持つ効果については、岩松正洋「異世界の表象における固有名現実素」『Stella』17号、1998年、213–231頁を参照。

51

本稿では2016(平成28)年に出版された新装版を参照した。同作については、拙稿「現代日本のサブカルチャーにおける(旧)ユーゴスラヴィア地域の表象とイメージ」、46–49頁も参照。

52

作者の米澤は、本作は太刀洗が先に謎を解き、守屋に助言することで語り手である守屋が解決に至る、という構造であるため、探偵役は太刀洗である、と述べている。『『遠い国の話を自分がどう受け取るのかという主題』にきちんと向き合いたいと思って『王とサーカス』を書きました——米澤穂信(1)』『文春オンライン』2015年9月12日、<https://bunshun.jp/articles/-/117>。

53

米澤穂信『さよなら妖精【新装版】』東京創元社、2016年、47頁。

54

これは現地では非常に有名なエピソードであり、筆者も現地で何度も耳にしたことがある。むしろ実際には、田中一生『バルカンの心——ユーゴスラヴィアと私』彩流社、2007年、205–206頁；拙稿「日本・モンテネグロ関係の濫觴」、44–45頁、註65で論じられているように、モンテネグロが日本に宣戦布告したという史料の根拠はない。しかし、多くの人びとがこの逸話を史実であると信じ、作中のマーヤのように日本人に対して話の種として用いること自体は事実である。

55

たとえば共和国を意味する「レプブリカ」も、初出時は「Republika」と書かれている。米澤『さよなら妖精』、47頁。

56

前掲。

57

前掲、216頁。

6. 視覚表現としての地名——日之下あかめ『エーゲ海を渡る花たち』

2018(平成30)年から2019(令和元)年まで連載された日之下あかめの歴史漫画『エーゲ海を渡る花たち』(全3巻)は、15世紀半ばの欧州を舞台とし、リーザとオリハという2人の少女がイタリアからクリミア⁶³まで旅するという筋書きである。彼女たちは第2巻で現クロアチア領のドゥブロヴニク(Dubrovnik)⁶⁴を訪れ、同地で道案内の依頼を受けたことで現モンテネグロ領のコトル(Kotor)⁶⁵に向かう。コトルが近づいてくると、2人の乗る船の所有者であるロレンツォは2人に「おい前見てみる まえみ なかなか 中々すげえぞ」⁶⁶と促し、コトル近郊の峻厳な山容を見せ、「『黒い山』この辺りの象徴的な景観だ」と説明する(図1)⁶⁷。

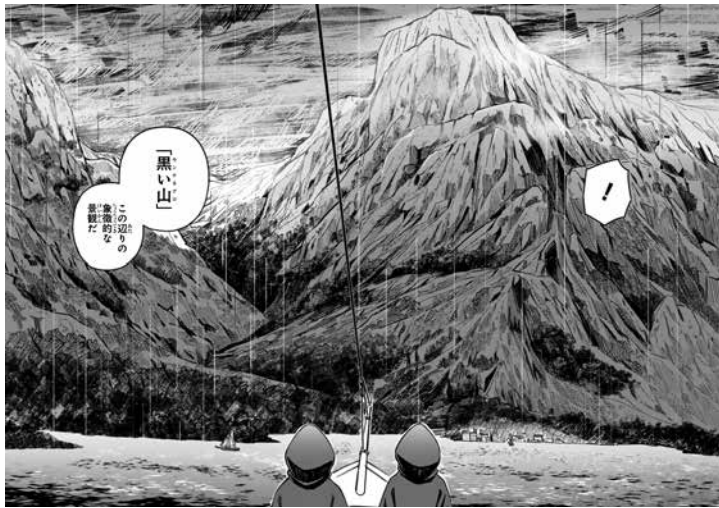


図1 国名の視覚的表現
(日之下あかめ『エーゲ海を渡る花たち②』フレックスコミックス、2019年、70-71頁)

この険しい山の絵は見開きに描かれており、モンテネグロという地名の語源を視覚的に表現している。本作では、地名が同時に景観を表す表現でもあることを利用し、漫画作品ならではの地名の印象的な提示がなされているといえる。

7. おわりに

本稿では、大正期から令和初頭にかけての日本の大衆文化において、モンテネグロの国名がどのように利用されてきたのかを論ずる試みである。以下に、本研究の有する意義について述べたい。

日本文化におけるヨーロッパの表象に関しては、これまで多くの研究がなされてきた⁶⁸。しかし、国名・地名に焦点を合わせ、その利用のされ方を論じた研究は見かけない。これはある意味では当然であり、「フランス」「ドイツ」など多くの国名は、より一般的な普通名詞として理解することが困難だからである。

58
前掲、189-190頁。

59
前掲、281頁。

60
前掲、290-291頁。

61
前掲、292頁。

62
なお、『さよなら妖精』の後日談にあたる短篇では、発表時には最初から「モンテネグロ」と記されていたものの、単行本への収録にあたって削除された。米澤穂信「ナイフを失われた思い出の中に」、秋月涼介ほか『蝦蟇倉市事件2』東京創元社、2010年、269頁；同「ナイフを失われた思い出の中に」、同『真実の10メートル手前』創元推理文庫【kindle】、2018年、第2段落。

63
作中では基本的に「クルム」と呼ばれる。作中の地図では「Qırım」と表記されていることから、クリミア・タタール語に基づく呼称を採用していることがわかる。日之下あかめ『エーゲ海を渡る花たち①』フレックスコミックス、2019年、12頁。

64
作中では基本的にイタリア語に基づきラグーザ(Ragusa)と呼ばれる。

65
イタリア語ではカッタロ(Cattaro)。中世には都市国家であり、第一次世界大戦まではオーストリア・ハンガリー帝国領であったが、歴史的にモンテネグロとの関係が深く、社会主義体制成立時にモンテネグロ共和国領に編入された。作中では、「コトル」「カッターロ(コトル)」「カッターロ」というように、セルビア・クロアチア語とイタリア語双方の表記が用いられている。日之下『エーゲ海を渡る花たち①』、136, 165頁；同『エーゲ海を渡る花たち②』フレックスコミックス、2019年、35, 42, 47, 67, 75, 78頁。

66
日之下『エーゲ海を渡る花たち②』、69頁。

ところがモンテネグロの場合は、「黒い山」という一般名詞による直訳が可能であり⁶⁹、また現地語の呼称と日本での慣用表記が乖離していることから、本稿で論じたように、架空世界の雰囲気作りや謎解きのための仕掛け、雄大な風景の描写といった、様々なやり方で活用されてきた。

ここからは、外国地名の表記は、単なる技術的な問題には留まらないということが指摘できるであろう。それは、ときに創作者の遊び心を刺激したり、想像力の源泉となったりして、創作物の展開に影響を及ぼすことがあるのだ。外国地名表記の研究にあたっては、その成立や変遷などの問題ももちろん重要だが、その利用のされ方もまた注目に値する、ということの本稿では主張したい。

本稿は令和5年度香川高等専門学校校長裁量経費に基づく研究成果の一部である。また、本稿の内容は全て筆者の個人的な見解であり、外務省や大使館の意見を代表するものではない。

67

前掲、70-71頁。ちなみにコトルに残された古文書では、1397年に「モンテネグロのヨハネス・アンドレイ (Johannes Andrei de Montenegro)」が送った書簡が最も古いモンテネグロへの言及である。15世紀半ばから同世紀末には“Montenegro”や“Montanea”など様々な表記でモンテネグロへの言及が見られるようになるので、ロレンツォが「モンテネグロ」という語を用いても不思議ではないといえる。И. Стјепчевић и Р. Ковијанић, “Први помени Црне Горе у которским споменицима,” *Историјски записи* 6, бр.1 (1953), стр.231-233.

68

すべてを挙げることはできないので、ここでは最近の研究として、『立命館言語文化研究』31巻1号、2019年での特集「日本における西洋中世のイメージの源泉と受容」の諸論文を挙げておく。

69

同様の地名としては他にも「アイスランド」が挙げられる。本稿の主題からは外れるので筆者は調査を行っていないが、同地は昭和期に入っても、「英軍の氷島撤退 米議員要求」(『朝日新聞』1941年7月14日、2頁)のように、国名の意識表記が用いられることがあった(ただし、同記事は、表題のみが意識表記であり、本文は「アイスランド」という英語に基づくカタカナ表記が用いられていた)。